



真夏の恋の歌

来間タロー

虹色の翼

雨上がり 傘振る君は 七色の 翼を付けた 降り立つ天使

story

二人で会う日の待ち合わせ。
小雨の中 僕は公園で 君を待っていました。

時間丁度に雨はあがり、 君の姿が見えました。
僕に気付いた君は、 傘を閉じて
傘を持つ手を左右に大きく振りました。

その時、 傘から飛び出た水しぶきが
君の後ろに 小さな虹を作りました。

それは、 まるで七色の翼ようで
君が 空から降りてきた天使に見えました。

恋の季節

南風 今年も恋を 連れて来る 風と波待つ 夏物語

story

海では サーファーたちが 風と波を待っている
ビーチでは シングルたちが 恋を捜して
僕は 海の家で 君と二人 かき氷を食べてます

繰り返される 十人十色の夏物語
夏は 南風に恋を乗せて 今年もやって来た

恋もかき氷も あんまり慌てて食べると
頭がキーンと痛くなるよ

ファッション センス

品定め 僕が選んだ 君の服 にやけた顔で 君は見透かす

story

珍しく 君が着る服を選んでくれというから
僕の好みで 選びました。

すると君は 何やら怪しい笑みで 僕を見つめ
「こういうのが趣味なんだ」って 言いました。

僕は、「きっと似合うよ」って 言いながら
ばれたかって 思い、少し 恥ずかしかったです。

互いのこと

打ち返す 気迫に満ちた その瞳 次第に分かる 君の性格

story

二人で初めて エアーホッケーをやりました。
最初は、楽しそうにラリーをしていましたが
次第に君の目は真剣勝負モードに変わり
僕に闘志が伝わってきました。

今まで気付きませんでしたが
君って 結構 負けず嫌いなんだね。

付き合うってことは、こうして だんだん
お互いの事を知ることなどと分かりました。

甘い果実

悔しいな あなたの頬を 染めたのは 僕のキスより 甘いカクテル

story

君と二人でショットバーに行きました。
少しアルコール度の高いカクテルを飲んだ君は
頬を赤く染め 目がトロンとして気持ち良さそう。

そして、色っぽい目で僕に微笑みました。
嬉しいけど、ちょっと悔しいな。

僕のキスより甘いカクテルだなんて

ようこそ

僕の部屋 初めて君が訪れて 取り上げられた 男の絵本

story

恋人になった君が初めて僕の部屋にやって来ました。

普段おしゃべりな君も 今日はよそよそしい。

でも、次第に いつもの君に戻りました。

そして、楽しい時間が過ぎて帰る頃

君は険しい顔で何かを捜している様子

散々僕の部屋を物色して見つけた物は

男子が見るエッチな雑誌

君は 悪戯な笑顔で

それらを全部没収して帰って行きました。

悲しいのか、嬉しいのか 複雑な気持ちです。

渚の風物詩

渚にて 君の水着を見たいけど 見つめられない 男の都合

story

君と二人で初めて海に行った時
君の水着を見て驚きました。

可愛くて、チョット誘う感じの
白い砂浜に映える水着でした。

良く似合ってるよって言うと
君は、嬉しそうにポーズをとって
戯けてみせました。

僕は、急に視線を逸らし他の事を考えました。
本当はずっと見ていたいんだけど出来ません。

変なのって 君は笑うけど
男には 男の身体の都合があるのです。

胸の花火

打ち上がる 花火の音も 聞こえない 君の浴衣に 心奪われ

story

君と行った夏祭り

二人 河原の土手に寄り添い座り

夜空に舞う 打ち上げ花火を眺めてた

でも僕は 君の綺麗な浴衣姿に 心を奪われて

花火なんて どうでもよかったです

花火の音より 高鳴る胸の鼓動の方が

僕には 大きく響いていました

風が鳴らせた鐘の音

求め合い 果てて見上げた 青い空 窓辺の鐘が 切なく響く

story

僕の部屋で君と抱き合い 一つになりました。

互いに求め合い、果てて見上げた窓の外。

そこには、いつになく青い空が広がっていました。

窓を開けると 窓辺に吊つてある風鈴が

そよ風に揺られて 音を響かせました。

その音色は、満足した二人には

なぜか切なく 聴こえました。

スコール

濡れた服 腕を絡ませ 赤くなり 夕陽見つめた 海岸通り

story

海岸通りを君と歩いていると、
突然雨が降り始めました。
二人は、近くのバス停まで走り
雨宿りをしました。

そこで、何気に君を見ると、
濡れたシャツの内側が透けて見えました。

君は、急に僕の腕にしがみ付き
赤い顔で「あっち向いて」と言いました。

僕は言われた通り、海へと視線を逸らしました。
しばらくして、雨が上がった水平線には
夕陽が現れ、海を赤く染めました。